

茨城大学の教育の質を高める教学マネジメント体制

茨城大学

寫田敏行・久留主泰朗・三浦範昭

1 はじめに

茨城大学では、卒業時の教育の質の保証について 1) 教育の内部質保証システムの構築、2) 卒業研究ルーブリックの策定と運用という2つの取組を中心に取り組んできた。今回は、1) について入口から出口までのエンロールメント・マネジメントを踏まえた教学マネジメント（内部質保証システム）の構築について報告する。

2 内部質保証体制の構築

茨城大学では、大学教育再生加速プログラムの支援を受け、教育分野のIR機能の強化を図った。

全学教育機構総合教育企画部門に、専任教員2名、専任職員2名を配し、そこにすべての学部から兼務教員を出してもらうことで、各学部の教育改善に係る情報ニーズを収集し、それに対してデータを提供するという体制を構築した。

タイムリーにニーズベースの情報提供を行い、各教育プログラムのFD実施を支援する体制を構築しつつ、学内における入口から出口までの学生調査について、項目整理および実施から提供の一元化を図った。

本学においては、内部質保証システムの構築は、教育改善情報のマネジメントであるという認識のもと、必要な情報が、必要な時に、必要なだけ、必要とする方々に提供できるよう、学内の教育改善情報のロジスティクスを最適化を進めている。また、内部質保証に関する規程を策定し、構築してきた内部質保証体制を明文化することに取り組んでいる。

3 DPを活用した学修成果の把握

本学では、1年次終了時点、2年次終了時点、3年次終了時点、4年次終了時点においてDPの達成度を学生の主観的な判断で回答してもらっている。これは、測定という面もあるものの、1年間を振り返って各DPの要素についてどのように学ぶことができたのか、ということ振り返ってもらうという意味合いもある。例えば、卒業時における各DPの達成度は、年々向上しており、学修成果が向上していることが伺える。これは、教職員にもDP達成度を、毎年、FD等で説明していることから、それを踏まえて様々な形で教育に対する意識の変化があったのではないかと、ということが示唆される。また、学生も毎年、DP達成度という観点で自らの学びを振り返ることから、自然な形でどの要素が達成できていて、どの要素ができていないのか、という（達成すべき）DPに対する自己評価を行うことで、「足りない部分をどのようにすればよいのか」ということを考えつつ、学修に取り組んでいるのではないかと推測される。

これらは間接アセスメントであり、今後はルーブリックを活用した直接アセスメントの要素を採り入れたものを開発していきたい。なお、直接的なアセスメントとしては、卒業研究のルーブリックを全学部で導入し、学修成果の把握だけでなく、教員と学生とのコミュニケーション・ツールとしても活用している。